

第35回日本臨床生理学会総会

安達 仁*

第35回日本臨床生理学会総会は秋晴れの中、栃木県的那須で開催された。獨協医科大学第1内科飯塚昌彦教授が会長であり、会長代行の小川研一先生のもと盛大に執り行われた。

特別講演として日本生理学会名誉会長の吉村正治先生が、前回の本学会会長の東京医科大学第二内科の伊吹山千晴教授司会のもとで「生体における重層的場の理論と臨床生理学」を講演された。シンポジウムとして「循環器疾患における血中BNP濃度測定の臨床的意義」が滋賀医科大学第一内科木下正彦先生と佐賀医科大学内科松尾修三先生座長のもとで、「消化器病学における分子生理学の進歩」が獨協医科大学第二内科寺野彰先生と京都大学消化器内科千葉勉先生座長のもとで、「肺血管原性肺高血圧症の病態と治療」が千葉大学医学部肺癌研究施設井上修二先生と獨協医科大学第一内科中元隆明先生座長のもとでそれぞれ執り行われた。また、パネルディスカッションとして「代謝・内分泌疾患における生理機能」が国立健康・栄養研究所井上修二先生と獨協医科大学内分泌内科笠井貴久先生座長のもとで執り行われた。一般演題はすべてポスター発表形式で、シンポジウムの隣の会場で行われた。

シンポジウムI、「循環器疾患における血中BNP濃度測定の臨床的意義」は、立ち見も出るほどの盛況であった。現在、日本におけるBNP関係の第一人者である滋賀医科大学の葛本尚慶先生が、心不全患者における血中BNP濃度測定の有用性を概説され、慢性心不全の予後判定に血中カテコラミン濃度測定と同様に血中BNP濃度測定も重要である事を報告した。次に大阪大学第一内科の山本一博先生が心機能障害・心肥大のスクリーニングにも、血中BNP濃度測定が役立つことを報告し、血中BNP濃度のもつ意味がひろが

る可能性が示唆された。また、群馬県立循環器病センターの櫻井繁樹先生は、CABG術後のBNP濃度は、その後の運動中の心機能の改善度と関連することを報告し、運動中の心機能を心予備能と考えると、血中BNPのもつ意義が見えてくるような気がした。その他、心筋虚血・心筋viability・高血圧・心筋症等における血中BNP濃度測定の有用性について各施設から報告され、午前9時から3時間におよんだシンポジウムも、あっという間に終わってしまったような気がした。

一般演題はポスター発表であるため演者と聴衆との位置が近く、活発に討論が交わされていた。東京大学の松本先生が心不全患者に対する運動中のNO吸入療法の効果を発表し、NO吸入が肺での換気血流不均等分布を減少させ、息切れ感を軽減させる事を報告した。心不全患者のQOLやADLを高める治療法の第一歩を踏み出す報告として、非常に意義のある発表と思われた。群馬県立循環器病センターの土田秀先生は、日常行われるBruce負荷試験でも、手すりに手をかけた状態での負荷試験法では運動時の酸素摂取量が過去の報告よりも少ないことを示し、Bruce負荷試験を元に日常生活活動度を指導するときには実際よりも高めの活動を許可してしまう可能性があるために注意が必要であることを喚起した。また、心臓血管研究所の西谷香織先生は運動負荷中のエンドセリン濃度の変化を報告し、運動中の非活動筋の血流はエンドセリン以外の物質が調整している可能性を報告した。運動中の血管拡張反応や血流分配は、慢性心不全患者の易疲労感や息切れ感につながる現象であり、このような報告は非常に意味のあるものと考えられる。

以上、第35回臨床生理学会の印象を報告した。那須という恵まれた自然の中で行われ、心身ともにリフレッシュでき、快適な学会であった。

*群馬県立循環器病センター